

井筒耕平 いづつこうへい

活動地域：岡山県西栗倉村

支援可能な地域：全国どこでも可能

現在の所属（役職）：村楽エナジー株式会社代表取締役

アドバイザー可能な分野

- ・再生可能エネルギー
- ・農林漁業への新規就業（特に林業）

地域での活動

地域おこし協力隊期間である3年間は、美作市上山地区において、4月から田んぼの準備を始め、10月の脱穀が終わるまではひたすら棚田での米づくりを行った。一方、美作市内における自伐林業とバイオマスエネルギーの導入を行うため、秋・冬は梶並・東栗倉・上山の3地区で、自伐林業の実践と鬼の搬出プロジェクトのコーディネートに奔走した。

上山での米づくりにおいては、大規模効率化を進める日本の農政とは全く異なる方向性を歩んできた。小さな田んぼで手をかけ、多くの人々に手伝ってもらい、高付加価値で米を販売したり、酒や地ビールを製造した。この経験により、公的な政策やメディアによる言説を信じるのではなく、自らが実践し、切り開いた先に、自らの充足感とともに多くの人たちの賞賛が待っていることを体感した。行政が求める”モデル”であるとか、”雇用”であるとかを優先的には考えず、ひたすら棚田で米を作ることを通じて、人々に実践に向けた勇気を与えることは、人口も経済も拡大する時代から全てが縮小する時代への移行期において、マインドセットがうまくいかないことに苦しむこの先進国・ニッポンに生きる若者にとって、夢を見させてくれる壮大なプロジェクトであると言えるであろう。

一方、自伐林業やバイオマスエネルギー普及に向けて、実践を進めてきた。自伐林業は、地域住民の森林2.5haの搬出間伐と、400mの作業道を開設した。初めての経験であったが、素人からでも林業を始められることを実証できた。また、東栗倉では、鬼の搬出プロジェクト（住民による林地残材収集＋地域マネーシステム）を実施した。需要先開拓が難しい中でのチャレンジであったが、180トンの木材を集め、100万円以上にあたる地域マネーを発行し、地域経済活性化を進めた。

この取り組みを通じて分かったことは、林業は小規模であっても十分に成り立つことであり、自伐林業の可能性を窺い知ることができた。一方、バイオマスエネルギーについては、需要先の確保および若手林業候補者の自伐林業へのコーディネートが不足していると感じた。

自己 PR 得意分野やアドバイザーの抱負

現在、西栗倉村において薪ボイラー導入の計画が進んでいる。私は、この基本設計および工事監理を担当することになっている。一方、薪供給についても十分な検討と実践が必要であり、並行して供給側の開発も進めている。この経験を生かし、他地域でもバイオマスエネルギー（特に薪・丸太）の利用についてのコンサルティングやコーディネートを行いたいと考えている。

※以下、バイオマスエネルギーに関する私の見解を述べる。

バイオマスエネルギーについては、自伐林業とのセットになるのが薪ボイラーであると考えられる。薪ボイラーとは、薪ストーブより大きく、長さ 1m ほどの薪（太さ 15cm 以下であれば丸太）を燃料として利用し、日帰り温泉や旅館程度の規模において使用できる。日本のバイオマスエネルギーは、2000 年代中頃からペレットやチップに注目が集まり、ペレットボイラーやチップボイラーが導入されている施設が多数ある。しかしながら、これらの燃料は加工が必要であるために、燃料代が高い。よって、経済性が極めて低い。たとえわずかに安くても、木質ボイラーの初期費用は高いために、投資回収がままならない場合が大半となる。しかしながら、薪ボイラーは、丸太または半割や 1/4 割の薪を投入するように、加工手間が少ない。確かに、薪投入は人手が必要であるが、先行事例では 4-6 回/日程度の投入回数であり、燃料代は大幅に（50～70%）削減されることから、十分に投資回収は可能であり、かつ、規模的には 1 つの施設あたり 200-400 トン程度の木材使用であり、点在する業務用施設への燃料供給については、適正な秩序ある持続的な林業形態で適合すると考える。これよりややサイズの大きい熱電併給（年間木材使用量数千トン程度）、さらに大規模な岡山県真庭市などに建設されるバイオマス発電（年間木材使用量 10 数万トン）などがあるが、サイズが上がるにつれ燃料供給の難しさと、木材需要創出の二律背反するものの規模が上がる。それぞれの立場ともに、史上初の試みであるから、現段階では批評はしない。

薪ボイラーについては、国内での実証例が少なく、仮説である部分も多いため、自らが実践する必要がある。美作市では、環境省の調査事業を受託し、周囲の方々との実践に向けた議論をゆっくりとしたペースで積み重ねている。これまで行ってきた議論を市民に共有し、ぜひとも美作市から自伐林業やバイオマスエネルギーの取り組みを広げることができれば、これまでのプロセスに意義があったと言える。